
ARMORED CORE2 ANOTHER AGE - A • I • N -

オオガラス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ARMORED CORE 2 ANOTHER AGE - A -

I - N -

【ZINE】

N7562Y

【作者名】

オオガラス

【あらすじ】

一人のレイヴンの元に、一つの依頼が舞い込む、
「貴方にお願いがあります」

オペレーターの冷たい声に、男は軽く溜息を吐いた。

- Mission 1 - 長い一日（前書き）

書き方が特殊なので見辛いかもしません。
それでも「」ご覧頂ける方には感謝を。

- Mission 1 - 長い一日

-----雨が降っていた 空を覆つのは 灰色の雲-----

雨が降っていた

降り止む気配は無い

外を見る 辺りは一面の砂

興味を引くような物は何も無い

目を閉じる 雨音が聞こえる

その音に耳を傾ける

一定のリズムで 雨は機体を打つ

そのリズムが心地良い

時刻 14:30 天候 雨

漆黒に彩られた機体の腹の中

操縦席のシートに 深く身を沈める

聞こえてくるのは水の音

目に見えるのは 崩れ埋もれたガレキだけ

”ザーム砂漠”

昔は都市であつたであろう面影だけを残し

今は 砂と石に覆われた世界

辺りに人の姿は無い

人間はこの土地を捨てた 用無しと言わんばかりに

そして 西に新たな楽園を求めた 人の住む都市

”ネオ・アイザック”

新たに創られた人の巣は そう呼ばれている

ネオ・アイザックに向かおうとしているヤツがいる

そいつを口説いて落す これが今回の依頼

あまりにも衣装が派手なので 都市には入れたくないらしい

ヒドイ話だ…

この砂漠のど真ん中 既に1時間以上待つていい

約束の相手は まだ 来ない :

小さく電子音が響く 味氣の無い「ホールサイン

『大丈夫ですか?』

それに続いて女性の声 その声もまた 味氣無い

モニターに映つた彼女が 切れ長の目で見つめてくる

だがその瞳は 何処か虚ろで無機質

それを隠すかのように掛けられた 縁無しのメガネ

流れるように顔に掛かつた綺麗な黒髪を

彼女は鬱陶しそうに横に撫で付けた

ついでそのまま 軽くメガネを押し上げる

彼女の容姿は上の部類だと思う まさに冷艶

だが 全体的にキツイ 冷淡な印象を受ける

その理由は 多分これだ 彼女には表情が無い

彼女の顔に 感情が浮かんだ所など 一度も見た事が無い

笑顔なんて見たことすら無い 泣き顔なんて論外だ

それはまるで 生身の女性と言つよつ 綺麗な彫像
そんな 美しくも素つ氣無い顔を眺めながら 思考の中へと埋没していく

彼女は言つた 『今回のミッションだけは お手伝い致します』と
何故? 真剣に悩んでしまつ 事あるじに邪魔ばかりするくせに
今まで役に立つた事なんて 数える程も無いくせに 何故..?
.....と言つかるの女 本当にオペレーターなのか?

『大丈夫ですか?』

再度 同じ問い合わせ 聞こえていないと思つたらしい

「...聞こえてるよ...」一
【二一】

それがこの オペレーターとは名ばかりの女の名前

彼女は 『そうですか』 と言つた後で

『でしたら』 と 続けた

『答えて下さい 大丈夫ですか?』

それに 一拍置いて答える

「……何が?」

二ーナが溜息を一つ 小さく漏らした

彼女は感情を 表情に出す事はまず無い

だが 霧囲気と瞳に如実に現れるのを知つていい

今がまさにそいつ まるで馬鹿を見るよいつな目を向けてくる

冷たい印象が 更に冷たさを増していくのがモニター越しに分かる

『準備は出来ているのかと聞いていいのです』

苛立たしげに彼女は言つ だからいつも答える

「見ての通り」

『解りません』

「……残念」

二ーナを無視して 今回の依頼をもう一度 頭の中で整理してみる

まず どつかのバカが 何に使つかはは知らないが

大型の移動兵器を開発していたらしい

その大型移動兵器を 製造途中に別のヤツが破壊した

……しかし 再起不能 とまではいかなかつた

お陰で」いつして 初めてのオツカイが出来るまでに回復した

その行き先は „ネオ・アイザック“

買い物にしてはちょっと大袈裟すぎる

止めたいと思うのは まあ 当然だらう

「仕事は最後までやるもんだらう……」

破壊し損ねたどつかのレイヴンへ 文句と舌打ちを送る

『大型移動兵器の事ですか?』

独り言が聞こえたらしい

「…ああ」

曖昧に頷く 確かに間違つてはいないが 正しくも無い

でも訂正するのも面倒で 彼女の間に 適当な相槌を返す

『今回の田標について なにか質問が?』

やはり無表情だった 動くのは 瞳を覆う瞼の その瞬き位のもの

彼女と会話していると 機械か何かと会話している錯覚に陥る

「いや……」

質問 と言われても ノコに来る途中で一通り聞いてある

今更 聞く事なんて無いが……

「そうだな もう一度確認だ」

彼女は俯くと 田の前のコンソールでも弄っているのか

何かを打ち込んでいるような 小気味良いリズムが聞こえてきた

『どうぞ』

彼女が顔を上げる 質問を待っていた

頷いて 「それじゃ」と言つて続ける

「田標の名前は?」

『グレイ・クラウド』

「大きさは?」

『詳細なデーターはありません が A Cの軽く3倍以上はあると思われます』

「…それで”Gray Cloud（灰色の雲）”ね

思わず空を仰ぎ見る

『他には何か？』

彼女の声に 視線を戻す 口元に手を置いて考える

「そうだな……」

目標の獲物を再確認してみよう 何せ相手のセンスは最悪だ

仮装パーティーにでも呼ばれたかと疑いたくなる程派手な衣装

「ソイツの武装について

彼女は再度 コンソールを操作する

普段は虚無を映しているその瞳に

今は 様々なデータが映り込んでいた

『製造途中のデータしかありませんが 宜しいですね？』

顔を上げて彼女は問う それしか無いんじゃ仕方が無い

「ああ」 一つ頷いてみせる 彼女は続けた

『まずは両腕からはグレネード弾 連射が可能です

次に エクステンションからは エネルギー系のマシンガン
更に本体上部 左右に8連ミサイルポッド

最後に 目標本体から小型自律兵器の射出が可能 以上です』

モニターに映つた情報を ニーナは一気に読み上げた

そして彼女は顔を上げる 同時に 彼女へ両手を上げてみせた

「立派 とても普通の兵器じゃ太刀打ちできないな」

呆れた笑いが込み上がる 連射が可能なグレネード弾?

祝砲にしちゃ賑やか過ぎだろ 花火にしても五月蠅過ぎる

それに加えてエナマシンガン ミサイル ビット……

まったく オツカイじゃなくて 兵器の押し売りにでも行くつもりか?

仮装パーティーにしたつて派手過ぎる 他の客が目を回すぞ

そんなんじゃ 門前で追い返されるのが闇の山だ

『……ああ だから『』に居るのが

黒服姿で待つてゐる理由を 改めて納得した

次いで 無表情の仮面をつけた女が言う

『その通りです ところで……』

三度コンソールを弄る 唐突に深い溜息

『今回も その機体で出るつもりですか?』

『ん? 何か問題でも?』

どうやら彼女は 今回もお召し物が気に入らないらしい

『武器はブレードだけ ですか……』

『素手よりは マシだろ?』

肩を竦めて答えてやる 軽口を添えながら

ACのアセンブルは パーツの数と人の数だけ存在する

武器だつて ライフル マシンガン バズーカ ミサイル etc

使う戦術・兵装 そのスタイルによって 呼称も様々用意されている

銃をメインで使うならガンナー ミサイルが大好物ならミサイラー
と言つ具合に

強力なものから連射の効くモノまで どれを使つかはレイヴンによ
つて様々だ

…… それだけ武器があるにも関わらず いつも使う気に入りはた
だ一つ

左腕にブレードだけ 後はせいぜいレーダー位 他は何も積まない

彼女はいたく それが気に入らないらしい

でも このスタイルだけは譲れない

イカレるとと言われても 馬鹿だと蔑まられても

あの人には近づくためなら なんでもやる

あの人みたいに 強くなれるなら……

だから仕事はこの機体で出る これでも何とかなる

もし出来なくとも 何とかする それが レイヴン

【レイヴン】

企業や政府に雇われる者を こう呼ぶ 要するに 傭兵

金さえ貰えればなんでもやる 仕事は確実に こなす

それが出来なければ 死ぬだけ

『無茶ですね』

唐突には 遠慮も無く二ーナは言つ

瞳には いつも通りの無言の罵倒

「無理じゃ ないさ」

彼女は諦めにも似た溜息を吐き 首を小ぐれく横に振る
それつきり 二ーナは黙ってしまった

沈黙の重圧が「クピットの中を覆つ

青白い人^トの光に照らされた二ーナの顔を呆と眺め

……ふと そこでさつきまで考えていた事を思い出す

何故 今回に限つて これだけ彼女は協力的なのか?

心配だから? 死ぬかもしれないから?

有り得ない それは確実に 有り得ない

今までの仕事を思い出す 思わず身震い

あれはいつの事だったか 彼女は言つた『敵機残り3機です』

それがどうだ 増えるわ増えるわ敵援軍16機

「どう言つ事だ?！」 慌てふためきながら問い合わせた事があつた

その時ニーナは何て言つた？ その答えは至つて簡素なものだつたろ

『忘れてました』 たつた一言 次に 『頑張つて下さい』 以上
終わり

何とか全機撃破 デイスプレイを殴りつけながら彼女を呼んだのを
覚えてる

あの時あの表情 そしてあの言葉 あれは絶対本気だつた 断言
できる

彼女はいつも無機質な 虚無的な目で たつた一言

『生きてらしたんですか』

あの時ほど ニーナに殺意を覚えた事は無い ついでに恐怖も……

それに… そうだ あれだつてそうだ 他のレイヴンとの共同作戦
もう一人来るからと デートの待ち合わせをしてた時の事だ

突然 上から横から3機のACが飛び込んできた

驚きながら彼女に聞いたよな 「どいつが味方だ？！」 つて

そしたら彼女はましても たつた一言 『さあ？』

『フザケるな！』 怒鳴ろうとしたら 戦闘開始

それも 3機同時の多人数プレイ 味方なんていやしなかつた

……あれは……ヘヴィだった……

それが今までの彼女の所業 下手したら10回以上は死んでいる
それ程までに 彼女のよこす情報はヤバイ 正確性の欠片すらない
……欠片くらい 有つても良いんじゃないかな…………？

それがどうだ？ 今回に限つては正確 いや 正確過ぎる

確かに 大抵の事は依頼主である監督局から聞いてある

しかし それは最低限の事だけだ ヤツがネオ・アイザックに向か
つている

通常の兵器ではまるで歯が立たない だからレイヴンに頼む これ
だけだ

グレイ・クラウドの武装についても 二ーナから聞かされた

ヤツの武装テータなど極秘中の極秘の筈 それを何故? どうやつ
て?

製造途中なんて言つてはいるが それにしたつて完璧すぎる

二ーナの顔をマジマジと見ながら 意を決して問い合わせす

モニターに向ひ 光を反射しながら 彼女の瞳が青く揺らめいて
いた

「……一つ 聞いても良いか?」

『却下します』

即答 思わず頭を抱える

相変わらず取り付く鳴も無い

溜息を吐きながら それでも彼女の瞳を見つめる

今日は本気だ と言う事を 言外に伝えてやる

『解りました』

二ーナは田を伏せると 小さく吐息

珍しく 彼女が折れた

『それで 何をお聞きになりたいと?』

「ああ」 言った後 生睡を飲む 彼女とこのまま会話をすると
どうもプレッシャーを掛けられているような気がしてならない

「……なんで今回に限って これほど協力的なのか

その間に 不意に彼女の瞳の色が変わる

この男は 何を言っているんだ? そんな感じに

『オペレーターですから 当然の事では?』

「どの口で言つてんだよ…」

思わずディスプレイを叩きながら 怒鳴り声を上げてしまつ

と叫つか 「イツにオペレーターの直覚があつたなんて…

その怒声にも やはり彼女は表情を変えない

「それで? 本当の所は?」

息を吐く まあ 感情が解らないのも 表情が読めないのも

言つてしまえばいつもの事だ 今更気にしたって仕方が無い

「……言えない?」

田の前のコンソールに腕を乗せ モニターに顔を近づける

見つめ合ひと数秒 田には程遠い時間の後

『……いえ 解りました お答えします』

田を瞑る 開ける そしてニーナは口を開いた

『貴方の事が……』

そこで彼女の言葉に割り込んで喋る ンな訳あるか

「心配ですから なんて答えは無しだ」

小さく舌打ちが聞こえた 表情は変わらずに

「……お前なあ……」

怒りを通り過ぎて 思わずガックリと肩を落す

『……解りました 正直に言います』

大きな溜息 今度は正真正銘 観念した そんな雰囲気を漂わせる

勝つた 仕事が始まる前なのに そんな充足感で一杯だった

「ああ 頼む」

緩みそうな顔を必死に堪えながら促す

それを見て ニーナは訝しげな表情を浮かべる

次いで 何を馬鹿な事を考えて……そんな目をしていた

素知らぬ顔でやり過す 「で?」 と彼女に話しき促す

『アレは害悪です』

彼女の顔から それこそ一切の表情が消える

一点を見つめる瞳は 何処か別な場所を見つめているような

様子の変わった彼女から発せられた言葉は やはり変わっていた
それは全く意味不明 思わず眉を顰め 首を傾げながら問い返す

「害悪？」

害？ 妨げ 支障 災 物事の妨げとなるような悪い事

頭の中で その単語の一般的な意味を思い浮かべる

いや 確かにアレは ネオ・アイザックにとっての脅威だろう

害になると書くのは解る でも しかし……

「……それは 誰の？」

彼女がまさか 都市の人間の事を心配するとは思えない

いや それは流石に言い過ぎだらうか？ もしかしたら優しい心も

……

『決つていいでしょ？ 我々のです』

そもそも当然 と言わんばかりの表情を浮かべながら 二ーナは言った

意味が分からぬ 我々？ 自分達と言つ意味か？ 二ーナも含めて？

「我々ってのは？ 都市の人間？ それとも 企業？」

彼女が一瞬 視線を外した すぐに戻す

それは隠し事や 言い辛い そんな感じじゃない

何だ？ 探るような視線を向ける それを彼女は躱す

『それは 勿論』

一拍溜めて彼女は続けた 次の言葉を待ち受けた

：だが 残念ながら その時は来なかつた

突然のサイレン 甲高い警笛音

コックピットの中で囁しい音が響き渡る

続いて別の女性の声

【テキ セッキン キケン キケン キケン】

機体の頭部 そこに備えられたAIからの警報

田の前のオペレーターよりも よっぽど頼りになる彼女が叫んだ

『ビリヤリ お喋りはここまでなのですね』

二一ナの言葉に 皮肉を込めて鼻を鳴らす

どうせ敵が来る事を知っていたんだろう

さつき田を逸らしたのは レーダーを見るため

オペレーター側のレーダーは 索敵範囲がACのそれよりも広い

敵の挙動をいち早く知る事が出来る

「一ナより そのレーダーだけ欲しいよな……

「……仕方ない」

今日 何度田かの溜息 まあ どうひうせよ

そんな高望みを言つたって それこそ 仕方が無い……

……せめてオペレーター 変えてもらひ事 出来ないのかな?

『では 無事に帰還できるよう 祈ります』

そんな嘆きの思考に割り込むように 彼女は無表情でさう言つた

「お前が? 誰に祈るんだ?」

そう問い合わせようとして 止めた

別に他人が何を信仰していたって構わないと思つている

だから それはどうでも良いと 聞きのを止めた

他に聞きたい事は山ほどある たゞひとお密をばづけよう

色々聞くのは それからでも遅くは無い

喋るかどうかは別として だが……

オペレーターの冷たい声が消える

入れ替わりに ノイズ交じりの女性の声が 耳元で囁く

【システム キドウ】

戦闘の合図 戦いが 始まる

- Mission 1 - 長い一日（後書き）

かなり前に書いていた小説です、直しと復習を兼ねて投稿させて頂きました。

ご覧のとおり句読点などを省いているので見辛いかと思います、それでも読んで下さった方、ありがとうございます。話数が結構ありますので、時間がある時に上げていきたいと思います。

-Mission 1 - 灰色の雲

低い唸り声が聞こえる 姿はまだ無い
音が聞こえる 音だけが聞こえていた
ACのブースターにも似たような音
距離はまだあるようだが……いや 見えた
まだ待ち合わせ場所には遠い
それでもあの大きさか……
「ヤツとの距離は?」
二ーナに向かつて距離を問う そして …
『距離 1500』
後悔する
「……1500……それでのデカセ……」
あまりの事に レバーを握る手が汗ばむ
それが 徐々にコチラに向かつてやって来る

「二ーナ 距離を報告 200キロ

顔は上空を向け 田だけ二ーナに向ける

それに 伏田がちに彼女は応じた

『解りました 距離1000』

いや 徐々に なんて速さじゃない

「おいおい……」

グレイクラウド 彼女は脚が自慢らしい

『距離 800』

速度が異常 それも 予想以上

『距離 600』

「二ーナ…もう良い…」

聞かなくとも解る 田の前にいるのだから

思わず笑い声が漏れる 何だ…これ…

「A Cの3倍? これで?」

田前に迫るソレは 二ーナの情報より遙かに甘かかった

3倍なんて可愛いもんじゃない 控えめに見ても4倍

いや 軽く5倍以上はあるぞ……また 騙されたか？

頭を過ぎる ナラシヒーナに田をやる 彼女と田が合つ

苦笑いを浮かべる いや と頭を軽く振る それは無いか

まあ 3倍でも5倍でも ロックよりテカイのに変わり無い

ヤツは「ナラの頭上を無視するよつに通り過ぎ 先へと進む

デートをするにも相手が悪い このお嬢様では高望みが過ぎる

いつその事 このまま『またね』で帰つてくれないかな……

空じて希望を抱いてみる 当然 その望みは叶えてもうなかつた

彼女は「ナラに駆け寄つてぐる 遠慮したい……ダメ……？

『…… だったら 落ちるまで付けてましょ……』

溜息一つ 言語を 決める

「一ナ ヤツとの距離を」

『はい 距離900』

900……思わず自分の両手を眺める

攻撃はまず届かない 当然か

通常の武器でもそれは同じ事

届くとしたら それはスナイパー・ライフル位のもの
それに反して ロチラの手持ちはブレードのみ

少しばかりの後悔

二ーナの瞳に非難の色が混じる 『それ見た事か』 と

苦笑い一つ 目線を上げる お嬢様を見上げて考える

「さて どう口説くか……」

瞬間 突然の破碎音 何かが弾けたような音

眉をひそめる 目を凝らす 数個の輝きが瞬く

更に数度 奇妙な音は続く もう一度 目を凝らす

光りの塊 白煙の束 あれって……

「 ヤバッ！」

気付くのが遅れた いや むしろ考えたくなかつた

さつき聞いた 二ーナの説明を思い出す

『本体上部 左右に8連ミサイルポット』

左右8発 計16発のミサイルの束

それがコチラを目標して突っ込んでくる

回避 頭に浮かぶ バカを言え

ヤツの持ち手は一つじゃない

もし全弾回避しても次が来る

舌打ち一つ ミサイルが間近に迫る 盾を探す

視線の先 前方に背の高いビル その残骸

両手のレバーを前に倒す 機体が前進する

ペダルを踏み込む ジェネレータが唸りを上げる

ブースターにエネルギーが送られる 火が入る

機体が前進 1歩 2歩 そのままブーストダッシュ

目を付けた残骸まで一気に駆ける

「間に合ひ……か!?」

目前に迫る無数のミサイル

一発 二発 三発

機体のすぐ脇を掠める

通り過ぎて後方で爆発

それを確認 一瞬目を離す

「 ツー！」

目を見開く 思わず言葉を失う

四発目 それが目のために迫る なんて迂闊

「クソツッ！」

舌を打つ 喙嗟に両手のレバーを左斜め前に倒す

機体がその動きをトレースする 左斜め前に走る

頭部の右側 目の横辺りを掠める ギリギリで回避

「 なツ？！」

4発目の斜め後ろに…… 5発目！？

この間合い…… これは躊し切れない ツ！

？死？

不吉な単語が頭をよぎる

ダメか 諦めの言葉が脳裏に浮かぶ

だが 突然コア本体から低い呻き声が響く

次いで 青い光がコアから放出 そしてミサイルを撃つ
コアに内臓されたミサイル迎撃システム 思わず拳を握る
ミサイルが機体に被弾する その直前で爆ぜる

爆風を搔き分けながらビルの残骸 その陰に滑り込む

直後 立て続けにミサイルがビルに被弾 爆風が舞う

ビルが軋みを上げながら揺れる 長くはもたないか
が無い
唯の石の残骸が あれだけのミサイルの雨を食らって耐えられる筈

素早く視線を巡らす 更に前方のビル ブーストを全開にしてその
陰に飛び込む

その後 後方で ビルの残骸の崩れる音がした

グレイ・クラウドは いつの間にか頭上 真上にいた

当たり前だが、自分の真下にまではロック出来ないらしい

少しホツとする、深く息を吸い込み、大きく息を吐く

とりあえずの休息、体勢と息を整える、気が緩む

『 馬鹿』

小さくニーナが呟いた

それは彼女の静かな警告

ハツとする、が、遅かった

『！？』

奇妙な機械音、続いて閉じられた複数の瞳

一瞬、思考と時が止まる、甘かった……

「 小型自律兵器・・・？！」

叫ぶと同時にその瞳が開いた、そして針が飛ぶ

いや、針のように細かい、無数のレーザー

声にならない悲鳴を上げながら、必死にペダルを踏み込む

ブーストダッシュ、向かう目標など決めていなかつた

ただ あの群れから逃げ出すためだけに走らせる

後方を見る ビットの姿が消えていた 前方に視線を戻す

「早いッ！…？」

目を見開く 既に目の前に回り込んでいる いつの間に…?

迷わず両方のレバーを右に倒す そしてペダルを踏み込む
ジェネレータが勢いを増す ブースターが火を噴き加速する
瞳の脇を抜ける 足元でレーザーが弾ける 敵の反応が早い
機体の後ろにへばり付かれている

「シシコイんだよ…！」

叫びながら急停止 そして前方を向いたままバックダッシュ

虚を衝かれたビットは動きを止め

そのまま逃げ切つて…

「…え？」

重い音が響く 機体が動きを止める 頭の中が白くなる

ニーナが溜息をついた 恐る恐る背後に視線を巡らす

「しま……ッ」

背後にはビル その残骸 機体を優しく抱き止めていた

そして足元に影が生まれる 砂漠の砂に無数の影

今度も 恐る恐る仰ぎ見る そして奴等と目が合つた

2度目のシャワー 機体も悲鳴を上げる

歯を食い縛りながらペダルを踏み込む

何度もかのブーストダッシュ 逃げる逃げる

かなりヘヴィな鬼ごっこ 捕まつたらそこでオシマイ

後ろも見ずに滅茶苦茶に走る 暫くして あれ……？

思わず立ち止まる 鬼がその役割を放棄したのか追つて来ない

後ろを振り向く 小さな爆発 それが連續して起つた

それは唐突な終了 ビットの稼動時間が切れたらしい

今のうちとばかりに 手近な建物の その陰に身を隠す

暗がりの中で 唯一煌々とするモニターに目を向ける

機体の破損率50% 半分持つてかれたか 唇が歪む

「……十分だ」

まだ戦える

……

予想以上に激しいアート

「チラの身にもなつて欲しい

まずは2枚 彼女の手札は見せてもらつた

……どちらとも 出来れば2度と見たくない

あと2枚 EN系のマシンガンとグレネード

「出来ればこのまま スタンダ（おあづけ）でお願いしたいな……」

『サレンダー（降りる）は勿論無しです』

珍しい ニーナが命をさせてくれるなんて

「解つてゐるわ……」

彼女の言葉に溜息混じりで応えを返す

状況はあまり良くはない いや かなり悪い

それじゃ と 今の手持ちのカードを確かめる

「… 手? 何を今更」

鼻で笑い 田を向ける 左腕のスペードのA

これが唯一の武器であり 最後の切り札

まずは お嬢様とお近付きになりたい

建物の陰からヤツの姿を確認する

遙か彼方でゆつぐつと 旋回を始めていた

それを眺めながら 思わず呟く

「どうしようか……」

それを聞いて ニーナは言った

『迷ひが必要がありますか？ 貴方の手札は2枚だけでしょ「二」』

「…………だよな」

まあ 結局の所 使える手札なんて限られている

「それじゃあディーラー カードをよこせ 一枚目は何だ？」

ニーナの雰囲気が 一瞬 險しい色を帯びる

「どうせなり 最後までつき合は」 と それを宥める

彼女は諦めたように溜息を吐いて 言葉に合わせた

正解 だが それじゃ足りない

拳で軽く ポンソールを2度叩く

「ヒットだ もう一枚追加

呆れたよつこ 彼女は目を閉じる

『コミット・カット』

そう この2枚 そして右手のブレード „MOONLIGHT“

「ついでこそ もう2枚だけ 追加しないか？」

ニーナの目が 訝しむよつに細められる

『欲を張りますね バーストする気ですか？』

「まだ余裕はあるぞ」

ニーナは軽く 首を傾げた

『そのカードは？』

「愛と勇気」

数秒間 ジッヒーに見つめられる

『随分と憐い手札ですね』

「時には鋼よりも強靭になる」

『現実を見たらどうですか?』

相変わらず言葉がキツイ 思わず肩を竦める

「……まったく お前には夢が足りないよ」

『女ですから』

「……お前だけだろ」

「さて どうするかな……」

そもそも一ノナの言つ “現実” を見るとしづ

使う手札は決まった ?O・B?・?C?・?I?・?T?・?C?・?A?・?S?

【Overd Boost】

略して ?O・B?

莫大なエネルギーと引き換えに

「冗談みたいな速度を提供してくれるブースター

そして 【コミット・カット】

一時的にジェネレータの限界を毀す事で
エネルギーの際限を無くしてしまう

確かにこの2つを合わせて使えば 或いは
しかし 失敗した時のリスクも デカイ

リミット・カットの唯一にして甚大なリスク
数十秒 エネルギーの供給が不可能になる

つまり「チラは 何も出来なくなる

暫しの逡巡 本当にやれるか迷う

1分 2分 3分 だが 考える時間はあまり無かつた

状況が…と言うより 彼女がそれを許してくれなかつた
ニーナの瞳に 苛立たしげな感情の色が浮ぶ

「 …まあ 他に方法は無い…か」

彼女に向けて苦笑と 両手を上げて見せる

では 何処で? どのようにして?

思わず、一leanorに田で問いかけていた

それに彼女は瞳で答えた　『自分で考へる』　と

「……はいはい」

瞳で語りあえるなんて　付き合にも慣くなつたもんだ

『まだ何も言つていませんが?』

「嘘つか」

『罪業妄想ですか?』

「何だそりゃ」

今日は珍しい事だらけだ　こんな軽口を呂くつなんて

「それなら　どうする?」

『自分で考へて下さー』

「お前なあ……」

『貴方の仕事でしょ?』

「もつとも　それを言われたら　返す言葉も無い

「解つたよ……」

もつ一度 溜息混じりに肩を竦める

そして 「だつたら」と続ける

「だつたら 参考までに聞かせてくれ お前なりじり攻める?」

参考と言つておきながら これは単なる興味に過ぎない

第一 オペレーターに聞いたつて 解決する筈も無い

『男らしく 正面から行きます』

あの弾幕の中を? 正面から? 正氣か?

二ーナの顔をマジマジと見る

彼女が何を言つてゐるかは解る……が

「… 全く 男らしい意見だな」

『ええ 今の貴方よりは』

そのための軽装でしょ? と 彼女は続けた

『……解つた解つた やれば良いんだろ?』

両手を挙げ 呆れた顔で言つてやる

「お前がレイヴンやつた方が良いんじゃない?」

『お断りしまや』

彼女は即座に答えてくれた それに苦笑いを浮かべる

「それじゃ ニーナを信じてみましょつか…つと

言いつつ機体の中で軽く腕を伸ばす 首を左右に曲げる 回す

『御自由に 信じるだけならタダですから』

……確かに 信仰するにはリスクの『エカイ女神だな

……雨が降っていた ミサイルの雨 視界を覆つのは Gra
y Cloud (灰色の雲)

空が輝いていた や そんな綺麗なもんじやない

白い煙を伴いながら ミサイルが数発迫る

それを ビルを盾にする事で防ぐ 更に走る

後方で幾つもの崩れ落ちる音が響く

走りながら考える 彼女の言葉を思い出す

つまり一ーナはいつ言つてこるのだ

上昇速度は「チラが上 だつたら〇・Bで突っ切れ

弾幕の雨なんて躲してみせり そして後ろを取れ

コ/ミ/シ/ト・カ/シ/トして あとま/上からお好きにビ/ル/ア... と

巨大な雲の上はいつだつて晴れてるもんだ ミ/サイルの雨も降りは
しない

「 ... 上等」

ミ/サイルが迫る それを手近な建物に隠れて遣り過ごす

「それじゃ女神サマ」

言いながら 口の端を上げて笑つ

「今日のお勧めの『テートスピット』は?」

『墓の中』

「い/つ/み/せ/ー/よ」

一ーナはその文句を無視し コンソールに目を落す

『少し待つて下さ』 探してみます』

相手の上を取ることしても 場所とタイミングが命

少しでも間違えば それこそ冗談抜きで墓の中だ

ニーナにはその絶好のポイントを探してもう一つ

「時間は？」

『見つかるまでです』

「……オーライ」

次の建物を目指して走る 隠れる

灰色の雲が間近まで流れて来る

ビルを背にその姿を眺める

グレイクラウドが僅かに瞬いた

瞬間 頭部を掠める光の弾丸

続け様に リズミカルな旋律が奏でられる

エネルギー・マシンガンの雨 視界を覆う青いカーテン

『まったく 心臓に悪い雨音だ』

手加減つて物を知らないのか？

どれだけ撒けば気が済むんだか

残骸の陰から飛び出す そのまま一気に駆け抜ける

光弾が砂地に穴を穿つ グレイクラウドがエコマシンガンをバラ撒く

『それじゃ まづは……』

両手のレバーを左に傾ける 遠くに見える残骸まで走る

エコマシンガンの弾丸が 背後のビルを次々と破壊する

足元で数発 青い光の残滓が弾ける

機体を左右に振りながら 次々迫る弾幕を避ける

いや 数発被弾 舌を打つ 流石に全弾回避は無理か

機体が駆けるたびに 後方でビルの残骸が崩れ去る

もう少しで辿り着く 目的のビルはすぐそこに見えている

不意に 聞きたくなかった機械音 背筋に寒いモノが走る

「読まれてた……？！」

不吉な音 それは予想通り無数の瞳

またしても丸い珠は 頭上でコチラを見つめていた

目的のビルを素通りし そのまま走り続ける

瞳は追つてくる このままだとエネルギーがもたない

「……だつたら」

ペダルを思いつゝり踏み込む 機体が砂上を滑る

長い長い足跡を残す シートに体を固定させて

次にブレーキを強く踏み込む 機体はソード急停止

当然 頭上を取ろうと無数のビットが迫る

『 … レイヴン?』

死ぬ氣ですか? と冷たい声でニーナが訊ねる

「男らしいだろ?」

満面の笑みをニーナに送つてやる

『それを馬鹿と叫ぶんです』

呆れた調子で彼女は応えた

程なくして ビットが頭上で狙いを定める

それでも動かない 動くには早い

タイミングを計る 間違えば 終わり

まだだ まだ 早い

⋮

手には汗 背筋を無数の蟲が這いすり回る

心臓が ドクンドクンと何度も高鳴る

…気がつくと 口元が 大きく歪んでいた……

ビットの砲門が開く その間際

目前のディスプレイを殴り飛ばす

表示されている文字は? O V E R D B O O S T ?

ビットから無数の針がシャワーの如く噴出される

それよりも早く 機体が文字通り弾け飛んだ

『…相変わらず…ヘヴィ…』

機体の背部には巨大なブースター

意識」と飛ばされるほどエネルギーが

速度となつて機体を前に弾き飛ばしていた

そのまま一気に突つ切る ビットを振り切る

視線の先 その上には灰色の雲が浮いていた

その真下を日掛けて走る 後方を確認する

ビットは遙か彼方 追いつくのは無理だ

視線を前に戻す 不意に違和感

眉を顰める 嫌な予感 場が静か過ぎる

それに ENマシンガンが止んでいい

突然の悪寒 それに続いて花火が上がった

『忘れてた!』

巨大なグレネード弾 しかも連射のオマケ付き

呻き声を上げながら それを必死に回避する

辺りに視線を巡らす 盾に出来るものは...無し?!

『突つ込むしかない...ツ!』

火球が迫る 爆煙が上がる 熱風が辺りを包む

ラジエータが日を覚ましたかのように動き出す

その音からも解る 相当な機体温度になつている

『...あ』

自分で呴いた筈の一言が やけに遠くに感じられた
歯を思いつきり食い縛る 体を固定し衝撃に備える
モニターの向こうで ニーナが一言 『馬鹿』と漏らした
足元が爆ぜた 赤々と燃えるグレネードはまさに業火
機体への直撃は避けたものの、至近距離での爆発
心地良いには程遠い爆風で 機体が大きく吹き飛ばされた
息が詰まる 声が出せない 体中が悲鳴を上げている 当然だ
O・Bの勢いそのままで 砂の上を数メートルのヘッドスライディング
暫くその場で横になる 機体を仰向けてにする
「痛……」

頭がグラグラする 目の前がチカチカする
起きたくない このまま寝ちまいたい気分だ

『午睡ですか？』

ニーナから 棘のついたモーニングコール

呆れました そんな雰囲気を纏わせながら

「ああ 良い夢が見れそうだ……」

『優雅な事で』

彼女は無表情で そんな皮肉を飛ばしてよこす

「……少しは労ってくれよ」

仰臥した機体の向こうに 本物の灰色の雲

グレイクラウドの股は抜けたらしい

体を動かすのも億劫だ が 仕方ない

ブースターを吹かして機体を立たせる

正直な意見 あのまま寝ていたかつた

でもそうなれば 次に着くのは花畠か

灰色の雲は遙か遠く アレが旋回していくまで暫く時間はある

だが 時間切れだ 余裕があるとは流石に言えた状況じゃない

そろそろ答えを貰わないと 墓に逝く前に消し炭になっちゃうだ

タイミングとポイントは? その答えを聞こうとして

それを察したのか 二ーナが相変わらずの顔で

『私を信用して頂けますか?』

その問いに 思わず「NO」と言ことせりふになる

そこを 今日一番の努力で言葉を飲んだ

「……ああ 勿論」

『そうですか』 彼女は言った後 『ですが』 と続けた

『本当にやるつもりですか?』

二ーナ自身で言い出した割に 懐疑的な問いをよこす

そもそも もう信じるしか無いだらつ 彼女の実力は知っている

役に立つことは殆ど無いが 立つ時はお釣りが来るほど役に立つ

『無茶が好きですね』

「無理じゃないからな それに…」

口の端を上げ 齒を少し出して甡甡てやる

『なにせ 女神サマのお甡甡だしな』

二ーナが口を開きかける それを 手で言葉を制する

『それに 向こうさんがお待ちかねだ』

遙か彼方 グレイクラウドはデートの準備を終えていた

「待たせるのは 趣味じゃ無い」

数瞬の沈黙 徐に二ーナは口を開いた

『解りました お気をつけて』

それに いつもの調子で応えてやる

『……オーライ』

日は暮れた デートも佳境 ラストはもっと派手に行こう

『さあて……』

パーティーを 始めよう

…

機械仕掛けの灰色の雲

まるで抱擁をねだるよつに

巨大な両手を広げ迫る

それを正面から見据える

良いだらつ 散々熱いのをもらつたんだ

そのお返しはキッチリしてやる

レバーを前に倒す 機体が拳動を開始

ジェネレーターが 鉄の心臓が動き出す

エネルギーが機体全体に周り始める

前進する 3歩田で砂を蹴る

疾走する 4歩 5歩 6歩

ペダルを踏む スピードが勢いを増す

ブーストダッシュ 背景が流れる 砂が舞う

寄り道はしない この道 正面から行く

待ちわびたように 遥か頭上で破碎音

巨体から 無数の光りの束が吐き出される

8連ミサイル 構わず進む 目標は決めてある

前方のビル そこに機体を預ける 次の瞬間

衝撃 立て続けにミサイルが訪れる 着弾する

ビルが崩れる 間際に飛び出す 疾走を再開する

モニターに田を走らせる 機体破損率25%

『良かつたですね 失敗してもすぐに死ねます』

さらっと恐い事を言つ 「そりやありがたい」

次に青い弾丸 ENマシンガン 幾重もの青い雨が降り注ぐ

機体を振る 右へ 左へ そして ビルの陰へ

「……死に際からが本当の戦い」

息を吐きながら 何時か言われた言葉を呴く

それはまだ レイヴンになりたての頃に教わったセリフ

ニーナが眉を顰めて

『何ですか?』

思わず笑みが零れる

「いつからが本番って事さ」

再度息を吐く アレが来る 解つてる

そのための休息 エネルギーの回復

以前のよつな失敗は もつしない

『チャンスは一度 それでもですか?』

唐突に 冷たい声で現実を語る 確かに でも

「一度で十分 何度も付き合つ気は無いぞ」

チャンスは一度 そう それを掴むか手放すか

それは自分が決める事 自分の腕が決める事

失敗すれば ただ 死ぬだけだ 口が歪む

そして不意に訪れる 予想していた目玉が襲い来る

聞きなれた音 見たくも無い カタチ

ビット 幾度も苦しめられた小型自律兵器 (イキモチ) だが――

「遊んでいる暇は無いんだ 悪いな」

ディスプレイに手を伸ばす コアの背部

巨大なブースターに力が集まる

正面にはビルの残骸 頭上にはビットの群体

力の収束 そして解放 機体が暴れる 右へ弾ける
ビルが一瞬で無くなる 視界が一面に広がる

ビットの姿が遠くなる お別れだ 軽く手を振る

巨大な影が伸びていく そして視界を覆う灰色の雲

間髪入れず グレイクラウドの両手が炎を射出

吐きだされる塊 身を焦がす幾つもの熱が 目の前に迫る

それを左へ右へ 機体を躍らせ回避する 相手は炎の円舞曲

そのままグレイクラウドの真下に飛び込む

砂煙が激しく舞う 砂を擦りながら機体を反転

「良い眺めだ」と

巨大な尻が目前に 徐々に遠ざかっていく

「 テートの相手は挑発するよつて腰を振る

「 二ーナ 後は任せる」

二ーナは静かに頷いた

ディスプレイに手を伸ばす

“ コミット・カット ”

途端 コックピットの中に警告音が鳴り響く

時間が無いぞ 時間が無いぞ 急げ急げ と鳴り響く

解つてゐる 解つてゐつて そつ慌てるな

胸が高鳴る 手が汗ばむ テートも終わりが近い
もう一度 ディスプレイに手を伸ばす

機体の背後に再び力が溜まる 一拍おいて機体が弾けた

歯を食いしばる 地面を滑るように機体が疾走する

グレイクラウドの尻が一気に近づいてくる

二ーナに皿を向ける だが何も言わない

グレイクラウドが迫る だがまだ遠い

ニーナに田を向ける 彼女が田をそらす

なぜ？ それを問い合わせる余裕はない

体中の骨も筋肉も悲鳴をあげている

グレイクラウドに迫る だがまだ向こうが早い

あと少し…あと少し…近づけ…近づけ…

時間が迫る 警告音ががなり立てる

このままでは時間切れ それ以上に体がもたない

少しでも気を抜くと意識が刈り取られそうになる

今ならまだ間に合つか？！ ここで跳ぶべきか？！

だが タイミングを間違えば全ては水の泡と消える

逡巡

それも一瞬 腹に再び力を入れる

ニーナを信じるって言つただろ

自分にそつ言い聞かせる

時間切れまで残り半分 だが 半分あれば十分だ

「二ーナー！」

叫ぶ デイスプレイに目を落とす

俯いたままの二ーナが 不意に顔を上げた

冷たい機械のような瞳で 影像のような口で 彼女は言った

『今です』

突然の轟音 グレネードの火球がグレイクラウドを直撃

二ーナの合図とまったく同じタイミングでそれが起こった

「なつー！」

突発的な事に思考が僅かに混乱

それはグレイクラウドも同じだつたらしい

動きが僅かに鈍り 高度が落ちる

『レイヴン』

二ーナの静かな一喝に 混乱を投げ捨て体が動く

機体が地面を蹴る 跳ぶ そのままペダルを一杯に踏み込む

重力に逆らい高速で上昇を続ける 何の制限も無い灰色の空

「……アレ…は？」

田の端に何かが映り込んでくる

1体のAC ビルの影になつてゐる

それは本当に一瞬見えた その程度

あれがグレネードを撃ち込んだのかな

頭の端でそんな事を考えーー…

…//…ル…ナ…

「……え？」

……視界が 青い

この青さは見覚えがあつた

? L S - MOONLIGHT? 最高と賞されるブレード

その青を呆と眺めていた まるで二ーナの瞳に似てるな

そんな事を考へていた 意識が田に浮いているような感覚ーー…

ああ そうだ そうだ このブレードを 早く突き立てないと

……突き立てる？ 何に？ 何で？ と言つか 今 何をして——…

『そのまま死ぬ気ですか？』

その冷たい声で
意識が一気に覚醒した

直後に足元で爆発

「何が起きてツ——？！」

理由も解らぬまま後ろに跳ぼうとして後ろが無かつた

視線の先にはただの虚空
機体は宙に投げ出され

真下にあるのは茶色の世界 砂だらけの人の残した残滓

機体の右手を反射的に突き出す
フレームが突き刺さる

以前にケレイケトウの顔
図らずも熱い口付けを交わす

自分がキレイでいたいのに、車の上に乗っていたんだとせんと理解する

今は足場はなく機体は宙ぶらりの状態 支えるのは右側のハンドル

火花をあける機体の右手　このままじゃもたない

そう認識した後は早かつた頭よりも先に体が反応していた

ブレードを突き立てたまま重力に逆らわず地上へと落ちる

そのまま真下にグレイクラウドを切り裂く

破片が飛ぶ 火花が散る 光りが舞う 雲が裂けていく

奇麗な断面 その隙間から ソレの内部が伺えた

厚い装甲 鉄の集まり それが今は ガラクタの塊

そして グレイクラウドの姿が 視界から消えた

機体は完全に支えを失う 浮遊感が身を包む

見上げる ヤツはまだ 上空を漂っていた 雲のようだ

腕を軽く振る エネルギーの供給を断つ 青い刀身は消える

”MOONLIGHT”の口が閉じる まるで 眠りにつぶかのようだ

不意に響く爆発音 その音は 徐々に下へと落ちて行く

機体の頭部の女性の声が 仕事の終わりを静かに告げた

「 終わった……？」

目を閉じて呟く 疲れきった体を操縦席に投げ出す

外を見る かなりの高さまで連れてこられたようだ

『お疲れ様でした』

一ーナの 味氣無じ声を聞きながら

「ああ お疲れさん 今回も感謝するよ」

頭の後ろで手を組んで 丘田を睨つて応えてやる

『……いえ』

暫くの沈黙 彼女と見つめ合つ

そして徐に 彼女は言葉を紡ぐ

『じひひはてひひよ こんな所で死んでもうひつ認はれることはなかったんだから』

「ああ わつ」

それじ や 瞠つの時間を始めよつ

「聞きたい事がある」

『却下します』

「わつやる前は聞いたよな? „我々“ つてのは誰の事だ?」

『言葉の意味そのままです』

「グレイ・クラウドの情報は？ 何処で仕入れた？」

『知る必要は無いでしょ？』

「お前は一体 何を考えている？」

『世界平和を』

と 至つて真顔で彼女は答えた

「……ニーナ 全然笑えない」

『そりですか』

伏目がちに応える やはり無表情だった

肩を竦める 仕方ない と呟いた後で

「だつたら最後の質問だ」 そう前置き

彼女の瞳を正面から見詰め 真顔で問い合わせた

「途中から記憶がない…なにがあった…？」

自分でも意味不明なセリフ 確かに途中まで意識はあった

だが 気がついたらグレイクラウドの上で ブレードを振っていた

それまでの記憶がゴツソリと 短時間ではあるが抜け落ちている

そんな困惑をよそに 彼女はやはり冷たい声で

『貴方は仕事をしていました それだけです 他には 何も

そう答えるだけだった

『貴方は……』

最後に 確かに二ーナは弦いた

気のせいかとも思ひほど小さく

だがその弦きは 上空の爆発音に搔き消される

『お疲れ様でした レイ、ヴン』

聞き返すと 口を開くよりも早く

二ーナは別れを告げると

『それでは また』

味気の無い機械音を残し 回線が閉じる

一方的な会話の終了 話す事はもう無い と言つ事か

溜息一つ 余計に謎が増えただけ 答えはまだ無い

恐らく 次に聞いても答えてはくれまい そんな女だ

「まあ 良いか」

とつあえずは生きていることだし 良じてやつ

樂観的にも見えるが いつでもなことやつてられない

氣の抜けた田を 外へ向ける そろそろ地面が近い

ペダルを踏み込む ブースターを吹かす 機体が宙に浮く
着地の衝撃を殺す そして地上に降り立つ

同時に セリウムで鳴り響いていた警告音が消え

エネルギー残量が0を示した

肺に溜まつた息を吐く

操縦席に 深く身を沈める

「……お疲れさん」

「ツクピット内壁を 軽く叩いて機体を労つ

長い一日が よりやく 終わる……

『言ひ忘れましたが』

「おわい？」

突然、ニーナの顔がモニターに映し出された

「……なに？」

戦々恐々、ニーナの次の言葉を待つ

『この後すぐ”アイレットシティ”に回りつけて下さい

「……何で？」

アイレットシティ？ 何でそんな急に……？

『寝ぼけているんですか？ 仕事があるから決まっているでしょ

……おこひら

「聞いてないぞ！」

『ですから今お伝えしました ちなみに企業からの依頼です

誰が行くか！ そう怒鳴りうとして それよりも早くニーナがそう
告げた

「……それはつまり？」

『断れば 貴方の食い扶持が減ります』

『……マジ？』

『当然でしょ、ハヘ。』

逃げ道無し 選択肢も無し 嫌がらせか？！

『それと』

それと？ それとだつて？ まだ何があるのか？！

『明日の10：00までにお願いします 時間厳守です』

「10：00ー。」

『はい それでは お願ひします』

それだけ言つと小馬鹿にしたように小さな音を響かせて 一ーナは
消えた

こつからアーレッタ・シティまで 何時間掛かると思つてゐるんだ……

灰色の空を仰ぎ見ながら 思わず呻きを漏らして こつ

『ハヘ……』

ビーハー—— まだまだ続きたひだ——

- Mission 1 - 今日の終わっこ（後書き）

これで一つ目が終わりです、こんな調子であと50枚ほどあります、時間がある時にでも修正しながらのんびり上げたいと想っています、ここまで読んで下さった方、ありがとうございます。

「……はい ええ ええ それでお願いします

女性の声が遠い 誰かに指示を出してこられるのか

さうに遠くで男の声が「はこ」と答えてくる

「あ すこません 一ノナむん」

女性の周りの雰囲気が 慌ただしさを物語つてこいる

それでも態度に機械的なところもなく とても好感が持てる

「準備は出来てますか？ 始めてしまつても良いですか？」

声が弾んでいる どうやら楽しみにしていたようだ

まるで男の子が玩具を貰って喜んだ時のような印象

『はー お願こしまや』

やつ答えると 彼女は小さく

可愛らしく咳払いを一つして

「それでは 早速ですが

イリスさんは遠慮がちに切り出した

「本試験は 実戦を想定した模擬戦闘です」

年齢こそ若いが この研究施設の主任なのだそ�だ

兵器の開発・運用などを任せられているとか

「全機破壊までの時間に応じて 追加報酬をお支払い致します」

サラもこれくらいしつかりしていれば……

「それでは テスト開始……なんですけど……大丈夫ですか?」

それに引き換え この男は……

思わず 涼息が漏れる

彼の担当になつてから涼息が増えたと思つ

「ははは」

「ツクツクピット中で 突然笑い出すレイヴン

イリスさんは顔を引きつらせていく

「あのお レイヴン?」

「ははは 待てえ」

イリスさんが小さく「ひい」と顔を上げた

可哀想に あれは怖いといつよつ

気持ち悪がっている表情

「なつ なに?...」

「あはははは」

男はなおも笑い続けている

田はぢ』か遠くを見ていのよつで

実に腐つた魚の様な眼をしている

「あ あのぉ.....」

「つふふふふふふ」

法えるイリスさんに『申し訳ありません』と告げる

レイヴンは未だに虚ろな表情で薄意味悪い哄笑を続ける

この男を見てこむといつも思つ この男を.....

『—— したくなりまづ』

イリスさんが小さく「え?」と聞いて固まつ

突然レイヴンが跳ね起きた そして酷く怯えた表情

その顔があまりにも情けなくて また 溜息

こんな男が本当に……

それでも氣が重いところに……

今日は疲れているのだろう 早く終わらせよう

レイヴンに改めて指示を出そうと顔を上げると

男は何故か 訝しげに眉を顰めながら難しい顔をして言った

「…………誰？」

駄目だ この男は 駄目だ

男には何も答えず モニターをイリスさんに切り替え

『これから行うテストについてですが』

少し怯えた表情のイリスさんに回線をつなぐ

「あつ はいっ」

少し声が震えているように感じる 何故だろうか

まあ あの男のせいだろうつ あまり気にせず本題に入る

私の質問に　いや　半ばお願いに　イリスさんは驚嘆した

……まだ　頭がボートとする

もしかして疲れてるんだろうか……って　当然か

ここは？ザーム砂漠？から東にある都市　？アイレットシティ？

次は　ここで依頼があるから行ってくれ　ニーナにそう言われた
しかも　10:00まで　との制限付き

グレイクラウドの件を終えて　バタバタと行ったり来たり

途中　セントラルオブアース近くで　得体の知れない連中と遭遇

これで時間を無駄にしたが　なんとか　アイレットシティに到着

到着してすぐに　休む間もなく機体の整備とパーシの交換

これに手間取り時間をロスト　まさかここまで酷いとは……

最後に組み上がった機体の調整　そして今に至る

途中から寝不足と疲れで意識が飛んでたのか

記憶があやふや　頭痛いし……

そう言えば　ここに来る途中で遭った連中

MTTやらACの団体なんだが、あれはなんだったんだ？

「どうもきな臭い感じがする、厄介」とが起こりそつた感じ

「まあ、その事は今は置いておいて、田の前の仕事を片付けよう

頭を数回、掌で軽く叩く、まだ田が覚めてないのか

なんか途中で見知らぬ女がモニターに映つてた氣もするし

「は？…」

モニターから素つ頓狂な声が上がった

「どうも困惑してこるよつだ、この声は記憶が間違つてこなきや

この地下兵器試験場の女性主任で、確かに【イリス】と言つたはず

ここに来た時、一通りの説明を彼女から受けた…と思つただけど覚えが無い

確かに何日か泊まり込みで、新型支援兵器のデータを探る、とか何とか

これが終わつたら、もう一度聞いてみよつ

「……はあ？…」

「…あから何を一人で盛り上がつてるんだ？」

それになんだその「あんた正気？！」みたいな声

「何を言つてゐるんですか！？ そんな……そんな事……

それだと最悪 レイヴンが死んでしまいますよ！？」

は？ 死ぬ？

「か……構いませんって いやでも 死んでしまつたら……その……責任
が……」

誰と何の会話してゐるんだ？

それから数秒 主任さんの声が途絶えた

何だかこの沈黙 憎く怖いのだけど……

「それは……」いちじらとしては願つても無い事ですが……

全然話が見えてこない が しかし

なんだかヤバイ方向に進んでる気がする

何せ主任さんの声がセリフと合つてない

「私止めましたよ でも超やつてみたい

みたいな 胸の高鳴りを抑えられない

そんな含みを持った聲音で話してゐる

「本当に宜しいんですか？ 宜しいんですね？」

「おこない 主任さん笑つてるよな アレ……

「……解りました 設定の変更を行います」

何かを変更するらしい 嫌な予感がする

主任さんの後ろから 別な男や女の声で

「本氣かよ……」とか「責任は無いんですね？」とか

「面白くなつてきた！」とかさつちやけてる奴までいる

その歓声にも似たざわめきを 感じて主任さんだらう

しーーと黙つて周りを静めていた そして

「……あの……レイヴン？」

おずおずと 話しかけてくる

「……なに？」

「 もうそろテキストを始めたいのですが その…大丈夫…ですか？」

全然宜しく無いんだけど 仕事なので一応「はー」と答える

「あつ……こ……いえ 大丈夫ならそれで良いんです!」

一 気に捲し立てるよつと主任さん

……？ なんか焦つてこるよつな……？

「ヒーリングで 設定の変更つて書いたのは?」

やつ聞くと主任さんは「まつあー」とか奇声をあげ

「ななな 何でもありません 気にしないで下れー。」

いやこいやこや 何でもあるだろ あんた

「いや でもや…」

なおも主任さんを問う詰めよつと口を開きかけた時

小さな電子音と同時にヒーラーが顔を見せた

『先ほどから句をしこるのですか?』

いつも突然出てくるな……

「こや向つて 仕事の話しちょつと質問を…」

『質問など不要です 貴方は『えられた仕事をこなせばそれで良いのです』

あれこれの句も告げられない 相変わらずキツイ

しかし その通りなので何も言えない

「解った 解ったよ んじゃ始めようか」

今日は疲れてるし わたと終わらせて休もう

右肩を軽く左手で叩く 体中が凝つてる

そりゃ こんな狭いところにいれば当たり前か

「…… そうだ」

はたと思い出した そう言えば

「一ーナ 一つ聞きたい事があるんだけど」

『なにか?』

「わざわざ モニターに知らない女が映つてたんだけど 知つてる?
?」

気のせいかも思つたんだけど それにしては鮮明だし

だがその質問に 一ーナは 深い 深すぎるほどそのため息

「どうした?」

「…… 何でもあつません テストを始めて下さー」

なんか怒ってる…？

「…あ…ああ」

何だろ？ なんか悪いこと言つたか？

疑問を抱えたまま とつあえずレバーを握る

そつこねば 今回の仕事の内容つて

「といひでテストつて 支援兵器の破壊だつけ？」

主任さんはその質問に ビコか落ち着きなく

アワアワとつた感じで答えてくれた

「あつ はー！ 4機の支援兵器 ？D - 1？の破壊です
出来るだけ 早い時間で破壊して下さい 時間に応じて報酬が追加
されます」

「了解」

実際に単純で明快 今回ほどやり樂な仕事みたいだ

「では 準備は宜しいですか？」

「いっでも」

「それでは テスト開始」

んじゃ 張り切つて行きま.....

「.....つて オイ」

「これは田の錯覚だろ？ ついに疲れが田にキたか？」

「なあ 主任さん？」

「.....はい？」

「なにこれ？ なんか動きが異常に速い気がするんだけど...？」

「...それは... そだだと思こまか」

「.....なんで？」

あれで テスト機体？

その辺の△△よつ馬鹿速いんですけど

「これを 破壊するの？」

「ハイ」

テヘッみたいな感じで返事されても困るんだけどね

「もう少し 遅めにならなー？」

『それが 1Jのレベルでの要望でしたので』

誰だよ そんなこと言つたの

…… そんなの一人しかいねえわ

さつきの主任さんの困惑っぷりを思い出す

こんな事言つ奴は アイツしかいないだらう

肺の中の重い酸素を全力で吐き出す

「……頑張ります」

前途多難 頭に浮かんだ唯一つの言葉

- Mission 2 - もう一人の・・・

「見た目以上だな……」

あのテスト機 尋常じやなく速い

軽い発砲音に続き 軽い衝撃

背後を取られ同時に攻撃される

放たれた散弾が 機体に穴を穿つ

そしてまた テスト機は距離を取る

「イヤな戦い方しやがる」

4体のテスト機は 高速で移動している

そのうち近づいてきた1体を斬りつつすると

背後にいる別のヤツが攻撃する

それに気を取られると また別のヤツから

さつきからこの繰り返し

「支援どこのか主力になれんぞ」

忙しく機動する敵を田で追う

素早く相手の位置を確かめる

前方に1体

左斜め後ろに1体

右斜め後ろに1体

そして 頭上に1体

ちゅうど三角形の中心に置かれている これが今の状態

しかも じゅうと回じスピードで等間隔でついてくる

まきこに艦に閉じ込められている気分

イヤになるほど完璧な布陣

「さて どうするかな」

今日2度目の自問自答

頭を悩ましている所に 小さな電子音

それに続いて ニーナの不満気なセリフ

『 やる気はあるんですか? 』

いきなりだな オイ

通信と同時に 頭上から散弾が撃ち込まれる

前に出てそれをやつ過ごす

前方のヤツが後退しながら攻撃

左へ平行に走り これを躊す

敵の布陣が崩れかける がすぐに元に戻る

やる気ね……はつきり言つて

「無い」

呆れているのだろう 小さく溜息が聞えた

『何故ですか?』

二ーナの問いかけは続く 敵の攻撃も休まらない

左後ろのヤツが撃つ

素早く後退

散弾が広がる前にその範囲から離脱する

前方と右後ろからの同時攻撃

左のヤツはまだリロード中

その隙を突いて 左後ろへ跳ぶ

左の敵機に 機体ごとぶつける

案の定 距離を離し機体を避けられる

だがこちらも攻撃を躲すことに成功

「理由ね……」

まあ 疲れている と言つのは確かにある

だが 戦闘になればそんな事は関係無い

理由は別にある それは実のところ……

「あの ニーナさん」

不意に別な方から声をかけられる

突然割り込んできたのは主任さん

少し不安なのだろう 声が落ち着かない

「彼は その 大丈夫なのでしょうか?」

20分以上の戦闘に 主任さんは心配してくれてるらしい

それがとても嬉しくて涙が出そうになる ニーナと大違いだ

「これ以上続けるのは危険です 今日はもう終わつとこひ事で……」

主任さんの嬉しい申し出に『そりですか』と二ーナ

『ところで今回のデータは 使い物になりそりですか?』

またいらん事を……

二ーナの主任さんへの質問にバツが悪くなる

『はい! D - 1の集団戦闘での記録は十分です』

嬉しそうな声の主任さんと対照的に 冷めた表情の二ーナ

「……あれ? え? …」

手元のデータを何度も見直す

「変…ですよ…ね…?」

研究員の一人がぽつりと言つた

「なんですかこれ」

別なところからも声が上がる

二ーナさんには有益な情報

と語つておこしてなんだけど

確かに変だ これはあり得ない

「何ですか？ IJの被弾率」

そう D-1の攻撃が ほぼ当たつていな

一見優勢に攻めているようで 実の所は真逆

「これは……遊ばれてる……？」

「主任さん」

突然のレイヴンの声に 体が跳ねる

「あ……はい？！」

「IJの上のレベルは あるの？」

「何を馬鹿な事を語つてるの？」

「これ以上なんて 人間が対処できるわけがない

正直に語つと IJのレベルならレイヴンに勝てると思つていた

「それなのに……こんな」とつて……

「…………… これが現時点で最高のレベルです……」

レイヴンは私の答えた 「やつ」と並んで

「やつそひ終わつにする 良いかな?」

なんて 簡単に並んでのけた

ちよつと匂に物に行つてくる

みたいなノリで

「終わつ……と並つのは……?」

「仕事するのや アレを破壊する」

毎じへて 言葉が中々出でこない

自分の甘さと認識不足に腹が立つ

なこより馬鹿にされたようすで……

レイヴンなんて 正直時代遅れだと呟つていた

私達こそ代わりを造れると思つていた なのに……

「分かりました……」

「了解」

主任さんとの回線を切る

さて……と 始めましょう

相変わらず 三角の陣形は崩れない

だったら力強くで行かせてもらつ

素早く左右に皿を走らせる

ちゅうど良い場所が少し離れた場所にある

レバーを右に倒す ペダルを踏む

右へ平行にブーストダッシュ

もちろん4体とも追走していく

だが程なくして 甲高い音が響く

右斜め後ろのD-1が壁に機体を擦る

「ちやんと周りは見ないと」

僅かに体勢を崩した1体に向けて

裏拳を放つと同じ要領でブレードを振る

D-1の半ばまで ブレードは食い込む

振り抜かず わざと食い込ませたまま

腕を戻す勢いで頭上のヤツに投げつける
2体の機体が激しく衝突し体勢が崩れる
それでも布陣を戻そうとする だが遅い
すでに真上に跳んでいる そのまま斬る
一つは投げられたヤツ
もう一つは 斬られたヤツ
残るは前方と左後ろの2体のみ
着地と同時に目の前のディスプレイを押す
そして右斜め前方に一瞬だけ跳ぶ
つられて左後ろのヤツが前に出る
次の瞬間 機体が弾け飛んでいた
O Bが発動 一瞬で左後のD - 1との間を詰める
そのまま水平に腕を振るつ
ブレードの刃が深々と食い込む

そして 先程と同じ要領で残る1体

前方のD - 1に目掛け投げつける

「残念」

さすがに これは外れた が

すでに O Bは発動している

投げつけたのは ただの目くらまし

距離を離そつと後退するD - 1 だが

「遅い」

敵は射程の中 刃の届く致死の距離

D - 1を鋭利な青い光が真横に薙ぎ払つ

【 モクヒョウ タッセイ】

機械の女性が 仕事の終わりを告げた

「終わった 終わった」

首を軽く回す 鈍い音がした

「これで今日の仕事は終わりの筈だ

……終わりだよな？　いや　そう願いたい

そこに小さな電子音　通信が入る

思わず体が跳ねる　だが――

「……あれ？」

モニターに　見知らぬ女性が映っていた

「えつと……」

それはさつも見た女　やっぱり氣のせいじゃなかつた
まじまじとその顔を眺める　見れば見るほど美人さん
整い方はまさに彫像…いや　雰囲氣からすると氷像か？

『田は』

その女が口を開く

『覚めましたか？』

あれ？　この声　もしかして……

「もしかして…　一ノナ？」

お互に沈黙 そして二ーナの溜息

『まだ寝惚けているのですか？ でしたら もう一つ依頼を……』

『待つた！ ちょっと待て！』

『冗談じゃない！ これ以上は死んじまつ！

『と詰づか二ーナ メガネは？』

そう 確か彼女はメガネをかけていた

それに髪型も全然違つ

まるで何処かに出かけるような……

『これですか？』

胸ポケットからいつもの縁無しメガネを取り出し

自然な仕草でメガネをかけた ああ 確かに二ーナだ

『もしかして 本当に気がついていなかつたのですか？』

『スミマセン』

『言つか これだけ変われば一目じや気がつけないと想つたけど

……

『節穴ですね』

間違いありません 本人です

女ってのはこんなに化けるもんなのか

どうせなら中身も変わってくれれば良いのに

やはり二ーナは絶好調で二ーナだった

「それで? 何でそんな格好?」

ああ 田が言つてゐる 『貴方には関係ない』と

軽く肩を竦める 別に無理に聞く氣もない

『それでは お疲れ様でした』

相変わらずの素つ氣なさ

小さな電子音がサヨナラを告げた

まあ 良いや 今はもう眠りたい

「お疲れ様でした……あの……レイヴン……」

間髪入れずに今度は主任さんからの通信

「どうしました?」

まさか もう一度データーの取り直し?

それだけは勘弁してくれ 心の中で嘆願

「D・1のビニがいけなかつたんですか?」

「えつ?」

予想外の主任さんの言葉に 思わず言葉がでない

「何處かに欠陥が無ければ このような結果にはならない筈ですー。」

泣いてる と言つか キレてる?

「D・1のプログラムは完璧だった筈です!」

ああ 確かに完璧だった でもセーー

「逆」

「えつ? 逆?」

「そつ 逆ですよ あれは完璧すぎた」

「完璧...すぎた?」

「ええ 動きが完璧で単調

そつ 最初こそはその速さに驚いたが

よく見ると動きが掴みやすかつた

「要するに 困む 撃つ 離脱 これだけ」

確かに陣形は 完璧だ でもそれが仇になっていた

「DICO・1がいるか解れば 対処も回避も割りと容易い

「でも これがもし広いトコなら結果は変わってたかも」

「それは何故?」

「障害物が無い」

わざわざやつたように どんなに完璧な布陣も

障害物があるだけで布陣が乱れるよじや

いぐらだつて浸け込む隙が出来る

それにも対応できなければ意味が無い

「なるほど…」

納得してくれたようだ これで眠れる

「解りました 改良の余地は 十分にありますね」

改良と言つた 人が動かせばどうなるか

あの動きに 予測不能な攻撃 十分脅威になると思つ

「今回本郷にありがとうござつた」

そう言えば、テストは数日泊まり込むって聞いたけど

休憩したらまたテストを?」

瞿くせぐれあえすれは
しへいたて付き

何より喜りと樂な仕事た
書くは移かせてせらうるかな

三六二 三回の分で一分で

たが期待してお過事とは反対の三位さんの答へ

仕事力と墓穴掘り

波の占星術の機体力完璧に力

その時はもう一度アスエ お願ひをあせんか?』

そひてもなし
か

勿論 依頼されてもいいに

「ありがとう」「わざわざおもてなし」

無邪気に笑う彼女は 嬉しそうに楽しそうに

「次ぎこそは 貴方を倒してみせますねーーー！」

「オイオイ 趣旨変わつてないか？」

「……良いや もう 寝たい」

現在の時刻 10:55

日の光を背に 一人 寝床を求めてさまづ

同時刻 コルナートベイシティ

ファーレーン海岸 バレーナ社工場近く

雨が降りしきる中 1体のACが 佇んでいる

いや よく見ると その周りには無数の残骸

元はヘリだった物 もしくは 戦車だった物

無数の鉄屑が散らばつている

その中で 一人静かに佇んでいる

小さな電子音 ハードサイン

『ミコト 依頼は終了した データーの転送を』

『解った』

ミコトと呼ばれた女性は このレイヴンの成した結果を依頼主へと送る

『かなり早かつたけど 途中で切り上げた?』

『いや』

その結果を確かめるように 彼女はデータに目を落とす

戦車 65体

ガードメカ 46体

敵総数 111体

『クライツ 残りは?』

『クライツ?と呼ばれた男は静かに首を振った

『それってもしかして 全滅?』

思わず苦笑いを浮かべ

『相変わらず バケモノよね』

ミコトはまだいか満足そうにコンソールを数度叩く

『まあ 良いわ データーは転送しておいたかい』

「ああ」

その返事を聞こへ!!「アメまた苦笑いを浮かべる

「の野の口数の少なれば 今に始まつた事ではない

小さな電子音 それはメールの着信音

それも依頼主である?エムロード社?から

『ねえ クライツ 追加依頼来てるけど』

「内容は?」

『追撃だつて 追い込みかけるみたい』

そのメールは クライツが予想以上の働きをしたため

これに乗じて一気に攻め込むと呟つ内容だつた

『是非もう一度力を貸して欲しい だつて どうするの?』

「悪いが」

クライツはすでに 輸送機に乗り込もうとしていた

「別の約束がある」

『 そ、う 解つた じ、や お断りね 』

「 ち、う してくれ 」

クライツが乗り込むと 輸送機は飛び立つて行つた

そして その場には誰もいなくなる

ただ 雨と鉄屑のみが 残つていた

- Mission 3 - 幸せな夢 騒がしい現実

現在 23:15

二ーナは「シックピット」の中で眠る男を一瞥し 数秒思考した
なぜこの男は こんな所で眠っているのか 意味が分からない
まあ どうせまたぐだらない理由なのだろう 考えるだけ無駄か
すぐに気を取り直すと 二ーナは徐に口を開いた

『レイヴン 仕事ですか』

……あ、う?

間の抜けた声をあげ 寝ぼけ眼を開く

二ーナと田を合わせ そして嫌な顔をした

深夜1:40

?アイレットシティ?からぞう!「東

極東の都市?フォークシティ?

『依頼の内容は 先程説明した通りです』

「一ーナは担当の男を見ぬ」ともなく

ただ淡々と文面を読み上げる

『試作品を預かるMTの護衛をお願いします』

それを男は 聞いているのかいなか

一見すると起きているのがどうかも怪しい

『別のレイヴンが試作品を破壊するために向かってこぬやうですか』

それに一ーナは全くお構い無しで話しが続けていく

『私のレイヴンを撃退して下せ』

そこ今まで一気に読み上げると ようやく顔を上げ

『それでは お願ひします』

それだけ言つと 一ーナは消えた

「…わか…た…」

「アンタが雇われたレイヴンだな?」

『ゴツイ2足歩行型MT それに搭乗する

試作品を預かった男は緊張していた

仕事とは言え なんで自分が……

心の中で恨み節を吐くのはこれで何度もか

たまたまMTの操縦が他より上手かつたと言つだけ

MTでの戦闘など 生まれてこの方一度も体験したこともない

それなのに なんで自分が……

視線は警戒と言つより恐怖に彷徨わせ

パイロットスーツの喉部分を引っ張り

少しでも酸素を確保しようとしたしなく

グローブの下では掌がびしょ濡れ

何度も自分の膝で拭いていた

「護衛対象は 僕の機体に積んである」

喉がカラカラなのを 唾液を飲むことでやっと補う

男は重圧に押し潰されそうなギリギリの所で

なんとか意地を張つて保つていた

それにもしても と 男は少し不機嫌だった

何度も話しかけてゐるに返事もしない雇われ者

「オイー・レイヴン聞いているのか!」

怒鳴りつけてもレイヴンは うそともすととも言わない

ただそれから 小じく呻き声のようなのが聞こえるだけだった

「オイー・返事へりこしやー...」

やせつてレイヴンは無言 駄は口だけをじ言葉を吐き捨てる

「おこー・向とか直つたら...」

そのままで叫んで だが男は言葉を飲んだ

レイヴンの様子がおかしい事に気がつく

「... くわ...」

男は闇を立てる

暗や...と呟つか しゃれて

「... くわ」

ちゅつと待つてくれよ.....まさか?..

「おこー... レイヴン... レイヴン...」

寝てる！？ 寝てるよね？！ ねえ？！

「起きてくれよ！？ なあ！ おいつて！」

だが どんなに喚き散らそうが レイヴンは起きる気配がない

「レイヴン！ おい！！ レイ……」

ヤバイヤバイヤバイ もう敵来るつて！ 来るつて！-

男が後ろを振り返った時だつた 遠くで光が2・3度瞬く

「えつ？」

男は遠くを凝視し そして悲鳴を上げた

青い機体が入り口近くで仁王立ちする姿

敵の肩口が破裂する それに続いてミサイル

白い煙の尾を振りながら ACとMTに猛然と迫る

「レイヴン！ 起きてくれ！！ 敵が来た！ レイヴン！-」

MTの男が悲鳴を上げる それでも動かないAC

迫る//サイルに MTは咄嗟にACの後ろに隠れる

そのまま脇をミサイルが飛び去つていき 爆発

間髪入れずに青い機体が遠くで腕を振る

その腕から黄色に輝く光の刃が文字通り飛びかかる

中距離攻撃型のブレード

白兵戦用のブレードと違い 威力は格段に落ちる

だがブレード部分を飛ばすことの中距離を補える

接近戦が苦手でかつ武装を充実させたいレイヴンが多く好む

青いACもその部類なのだから 中・遠距離に対応した機体構成だ
った

だが 接近戦しかできない筈の黒いACは微動だにしない

MTはそんな味方のACを置き去りに壁の隅に素早く逃げこむ

同時に着弾音が響いた 次いで機体が倒れこむ鈍い音

黒いACに その光刃が当たっていた

「大丈夫…か？」

恐る恐るMTの男はレイヴンに問い合わせる

だが 返事はない

「 まわか… 今のアレで… ? 」

男は背中に冷たい汗をかいていた

これでレイヴンが終わりなら次は自分

最悪な未来を思い描いていた

「 … おい? … おいー? 」

突然むくつと黒いACが起き上がる

そのまま敵の青いACを静かに見つめていた

「 起きたのか… ? 」

そのまま緩慢な動作で機体が起き上がり

動き出したと思つたら 走り出した

そのまま 敵に突つ込んでいく

いきなり向かつてきた相手に驚いてか

それでも青いACは反射的に黄色い刃を飛ばす

だがそれを 黒のACはあつさつと回避する

そのままブレードを真横に払つまつに振つた

だが青いACもそれをギリギリで回避する

それでも黒いACの動きが止まらない

黒のACはOBを発動し 青のACとの間合いを潰す

青のACはそれを迎撃しようと腕を上げる

銃を構え引き金を引く それよりも速く

黒のACは下から上にブレードを切り上げ

青のACの構えた銃器」と 腕を斬り落とす

そのままの勢いで体当たり 青のACが吹き飛ぶ

飛ばされながらも青のACは負けじとブレードを飛ばす

それを読んでいたかのように黒のACは真横に回避

青のACの側面でブレードを振り上げながら

黒のACにのるレイヴンが雄叫びを上げた

「眠てる邪魔をすんなあああ……」

青のACは 頭部から肩へ斜めに斬り落とされた

「スゲエ……」

初めて田の辺たりにしたAC同士の戦闘に

MTの男は呆然と口を開けて声も無かつた

青のACは戦闘の意志が無くなつたのか

尻餅をつく形で黒のACを見上げていた

「なんだありや…?..」

それは突然 青のACから射出された

ミサイルでもレーザーでも弾丸でもない

小さなソレに MTの男は田を凝らす

ACに詳しくない男はそれがビットだと理解出来ず

武器なのかどうかすらも分からぬでいた

だがそれを見た瞬間 黒のACは走りだしていった

迎え撃つように 小さなモノからレーザーが放たれる

被弾しながらも 回避する程じゃないとばかりに

お構いなしと黒のACが接近し そのままブレードを

小さな無生物 ビットへと突き刺す

小さな悲鳴を上げて それは破裂する

「ビックア もう見たく無い……」

レイヴンは心底嫌そうな声で小さく呟いた

そのまま青のACIに振り返ると レイヴンは言った

「まだやるかい?」

数秒 2体のACIは見つめ合つ

徐に青のACIは持っていた銃を地面に落とす 韶き渡る鈍い音

そのままゆっくりと両手を上げた もうたくさんだとばかりに

回線越しに ふたりのレイヴンは通信を交わす

それをマーの男はどうしていいか分からずただ見守る

「わかった」

黒のACIのレイヴンが笑いながら答えると

「行けよ」と 黒いACIのレイヴンは言つ

「じゃあな」と 青いACIのレイヴンは答えた

鈍い音をタテて 青い機体が動き出す

背を向けると そのまま 走り去る

「逃がしたのか？！」

MTの男が驚きを隠さず問い質すと

「ん？ ああ 別に「殺せ」と言われてこる訳じゃない

と 黒のACのレイヴンが 悪びれもせずに答えた

「しかし……！」

なおも詰め寄るとしたMTの男よりも早く

黒のACの中で 小さなホールサインが響く

『相変わらず 甘い事ですね』

二ーナが話しに割り込む

その声には 怒った風もない

「悪いが？」

『別に』

二ーナはそれだけを レイヴンに告げた

実際 どうでも良いくと思つてこむのか

彼女から感情を読み取ることはできない

「ところで 仕事はこれで終わりだろ?」

中途半端に かつ激しい目覚ましのせいか

レイヴンはまだ眠そうな顔をしていた

『はい 護衛は完了しました』

MTの傍らに 企業の人間なのだろう

何台かの車両と人間が到着し作業していた

「それじゃ お疲れさん」

『はい お疲れ様でした』

田の光が眩しい

只今の時刻 10:30

カラダが……痛い

体の節々が 変な音をたてる

睡眠不足

中途半端に起きたせいか

無駄に頭が冴えて眠れなくなった

しかたなく街に出て飲みにいつて

そのあと記憶がなく 気づいたら部屋にいた

変な体勢で寝てたせいか 首まで寝違えていた

今日はこのまま寝て過ごさん

心に決めてからは早かつた

そのままベッドで寝直そつと 一歩田を踏み出す

不意に 小さなホールサイン

部屋の備え付けの小型のコンソールが鳴いた

『爽やかな朝ですね』

「一ナだった 無表情で言つたやつじやない

『いや 寝るよ。』

『早速ですが 仕事ですか』

無視か ララ

『どの依頼になさいますか?』

…? どの依頼?

「選ぶほど 依頼があるのか?」

やる気はもう無いが

仕事の内容だけは気になつたので

コンソールを数回叩いてモニターに映す

へえ 三件か

「この仕事の詳細は?」

はい と言つた後 ニーナが丁寧な口調で

『航空機の護衛 戦艦の破壊 それに……』

何気ない会話をするかのような口振りで

『セントラルオブアース襲撃者の排除です』

「ふーん……?」

ん? セントラルオブアースを 襲つた?

「それって……」

不意に小さく着信音

コンソールの右上にメール着信の表示

「……仕事が2件増えた」

『そのようですね』

今度は 向こうから聞いてくる

『一つは? エムロード社? から』

内容は単純 ? エムロード社? が本格的に? バレーナ社? の工場に
襲撃を仕掛けた

だが ? ファーレーン海岸? に設置された砲台が邪魔 だから先に
行って破壊しろ

と言つのがこの依頼の概要 要するに 露払い

報酬は650000Cと悪くは無い

『もう一つは 排除の依頼ですね』

とあるレイヴンを消すために 力を貸して欲しい

? バローズビル? へ依頼と称して誘き出す そこを一人で叩く

報酬は2人で山分け 1人頭76000C

かなりの額 にしも口クでもない

『排除の依頼で宜しいですね?』

オイマテ

「こんな依頼は受けないよ」

自信も実力も無いヤツとは組めない

なにより目標の情報が全然無い キケンだ

とりあえず近場の依頼は…露払いの砲台排除

もしくは セントラルオブアースか

……あれ?

「一つ消えた 他のレイヴンが引き受けたのか

露払いの方は別のレイヴンに取られたらしい

『セントラルオブアースの依頼を受けておきました』

「まだやるなんて言つてないんだけど……」

勿論 ニーナは黙殺 淡々と依頼の受領作業をしていた

朝の爽やかな空気をも濁らすほど深いため息を吐く

まあ 良いか 少し気になる事もあるし……

「セントラルオブアース襲つた奴らな 恐らく見かけた」

『いつ?』

「アイレットシティに向かう途中 たまたま森の中で
ヘリの中から見ただけだったけど うまく偽装してた
セントラルオブアース襲つたためにいたのか 納得した
『それではセントラルオブアースに向かって下さい』

「了解」

目指すは中枢都市 ?セントラルオブアース?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7562y/>

ARMORED CORE2 ANOTHER AGE - A・I・N -

2011年11月30日17時45分発行